

大阪体育学会第52回大会 シンポジウム

## マスターズ甲子園の開催からみるスポーツプロモーションの可能性

The possibility of sport promotion based on the Masters Koshien event

谷 めぐみ\*

Megumi Tani

谷 よろしくお願ひします。タイトルが「マスターズ甲子園の開催からみるスポーツプロモーションの可能性」ということで進めさせていただきます。先の高橋先生と福田先生は実践者という立場で実際にスポーツだったり武道だったりをされている中でのお話でした。聞いてて私もマスターズの勉強なり研究をしている中で興味、関心のあること、また学べることが多い話でした。私の話では実際にマスターズ甲子園というイベントを通じて、こういうスポーツのプロモーションができないかということを中心に、今回頂いたタイトルを基に内容を構成させていただきました。配布資料はこちらを提出させていただきます（図1）。もう少し皆さんにイベントそのものについて知っていただきたいということで、写真をたくさん盛り込んで

お話を進めさせていただきたいと思ひます。

マスターズ甲子園というのは2004年に始められた大会です。元高校球児の人たち、つまり甲子園で野球をすることに憧れた高校球児というのは約200万人いますが、その人たちにもう一度、目指していた甲子園球場を再び選手としてチャレンジできないかということで2004年から始められた大会です。こちらは第1回大会の選手宣誓をしていただいた2人です（図2）。その当時の最高齢者で72歳でご参加いただいた山口の選手です。隣に居る女性の方はマネジャーではなくて、実際に高校時代、男性部員と一緒に汗水たらしながらプレーをしていたということで参加をしていただきました。このマスターズ甲子園の当日も、実際に試合中にマウンドからピッチングをしていただいたという女性の選手です。

高校野球だとベンチに入れるのは17人です。マスターズ甲子園の場合は50人までベンチ入りに登録することができます。一人でも多くの人たちにグラウンドに立って、そしてバットを握ってボールを打ってもらい、守備についても、勝ち負けにこだわらずに皆で集まってグラウンドでプレーをしたいというような人たちに対してこの大会を開催するに至っているからです。13年の大会は、82歳の方が実際マウンドからピッチングされるというようなこともありました。高校を卒業したらマスターズ甲子園に

大阪体育学会第52回大会シンポジウム「スポーツとエイジングの良好な関係を考える」



マスターズスポーツ振興支援室 谷 めぐみ

【図1】 配布資料

\* マスターズスポーツ振興支援室

## 「マスターズ甲子園」とは

「マスターズ甲子園」は、全国の高校野球OB/OGが、性別、世代、甲子園出場・非出場、元プロ・アマチュア等のキャリアの壁を越えて出身校別に同窓会チームを結成し、全員共通の憧れであり野球の原点でもあった「甲子園球場」で白球を追いかける夢の舞台を目指そうとするものです。2004年に第1回大会として始動し、今後は日本の「フィールド・オブ・ドリームス」として、全国200万人と推計される元高校球児による各地域でのOB/OG野球クラブの活性化、生涯スポーツとしての野球文化の発展、熟年(マスターズ)世代と共に、高校野球児を含めたユース世代にも広げメッセージを発信しながら、活力と夢に満ちた個人・地域・社会・未来への創造と発展に寄与していくことを目指します。



第1回大会開会式・選手宣誓



【図2】「マスターズ甲子園」とは

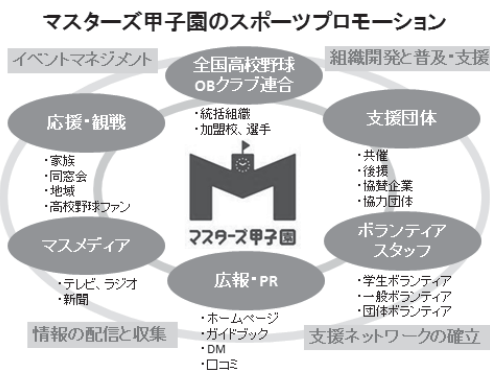
参加することができますので、下は18歳から上は82歳。老若男女が肩を寄せ合いながら、こうやってチーム一丸となって試合に臨まれています。

先ほど、ご覧いただきました2004年のポスターから、かなりブラッシュアップされまして、2006年から広告企業の電通さんがボランティアで、キャッチコピーやポスターのデザインとかも手がけてくださるようになりました。2006年に初めて電通の方に作っていただいたのが、「46歳じゃない。高校31年生と呼んでくれ。」であったり、「いい歳して甲子園、行こう。」(2008年)、というようなキャッチコピーを使ってポスターを撮影していただきました。「人生に、甲子園が足りなかった。」(2010年)といったものもありました。今からまた春の大会が始まりますけれども、夏の甲子園というのは予選大会を勝ち上がって、そして県の代表として出場するので、「あの夏の宿題、やり残してないか。」(2012年)というようなことで参加する方々の心に響くようなコピーライトを作っていただいています。

そして昨年(2011年)の11月にも2日間、大会を開催しました。今まで地方予選大会というのを各県で開催しているんですが、その県の参加する選手の方々から、もちろん甲子園球場で足を踏み入れてプレーするのはいいんだけど、でもやっ

ぱりOBの日本一も決めたいよね、というような声が上がることになりました。2004年から始めた大会がちょうど10回目の記念大会にあたりましたので、全国高校野球OBトーナメントというのを開催してみてもどうかというので、記念大会として開催しました。

今回のテーマに上げたマスターズ甲子園のスポーツプロモーションの中で、実際にマスターズ甲子園を開催するにあたり、行なっているさまざまな活動について報告いたします(図3)。全国高校野球OBクラブ連合という、いわゆる高校野球で言う高野連にあたる組織があります(図4)。基本的には甲子園本大会に出場するためには、地方予選大会を開催することになって



【図3】マスターズ甲子園のプロモーション

## 組織開発と普及・支援

### <大会体制>

主 催:	全国高校野球OBクラブ連合
主 管:	マスターズ甲子園実行委員会
大会事務局:	神戸大学発達科学部スポーツ振興支援室
共 催:	朝日新聞社
後 援:	朝日放送株式会社、日刊スポーツ新聞社、株式会社サンテレビジョン、兵庫県、 兵庫県教育委員会、西宮市、西宮市教育委員会、西宮観光旅館協同組合、 西宮商工会議所
協 賛:	アシックスジャパン株式会社、サントリー金麦、JTB、上新電機、リョーイン、 フォトクリエイト、ジェロントロジースポーツ研究所
特別協力:	電通、ソニーミュージック、ロード&スカイ、
協 力:	西宮市立西宮高等学校同窓会松柏会、市立西宮高校ブラカードOG会、 兵庫県警察音楽隊、兵庫県吹奏楽連盟、兵庫県高等学校吹奏楽連盟、 兵庫県大学野球連絡協議会、社団法人兵庫県子ども会連合会、 財団法人兵庫県青少年本部、こころ豊かな人づくり500人委員会全県OB会、 財団法人兵庫県健康財団、NPO法人ヘルスピニア夢ひょうご、 財団法人日本スポーツクラブ協会、株式会社クレーマージャパン、 ピップフジモト株式会社、株式会社オンライン、東洋メディアサービス株式会社、 ADM有限会社、ノホテル甲子園、神戸ポートピアホテル、B-COMパーク、 神戸YMCA学院専門学校、大阪リゾート&スポーツ専門学校、 学校法人日本写真映像専門学校、神戸女子大学、甲南女子大学、 松蔭中学校・高等学校、大阪教育大学、神戸大学

【図4】組織開発と普及・支援

います。各都道府県で幹事校というのを決めまして、その方々のリーダーシップで予選大会は運営されています。2004年に第1回大会を開催したときは、出場チームは4県だけで終日、甲子園球場を借りて対戦をしていただきました。初年度はこの開催に向けて全国高校野球OBクラブ連合に集まってくださった学校が85校ありました。それが第2回大会になりますと甲子園で試合できるということで、新たに同窓会チームを結成してたくさん学校が加盟してくださいました。最終的に10県で予選大会を開催するというようなことになり、加盟校数は119校まで数を伸ばしました。

5回大会になるとさらに、1回目の大会から290校ほど増えまして、29のリーグで予選大会を開催しました。第3回から加盟してくれた県が増えたんですが、そこで問題になるのが、甲子園球場は2日間しか貸してもらえないという日程の制限です。そしてその中でやはり多くの元高校球児の方々にグラウンドに足を踏み入れてプレーして欲しいという大会運営側の思いというのもありました。加盟する学校を一都道府県につき8校集めていただき、8校集まったら

予選大会を開催していただいて、そして都道府県の代表として甲子園の本大会に出場することができるという形でお願いすることになりました。徐々に県でも校数を増やして予選大会を開催していただいているということです。現在3月3日時点で481校加盟しています。関西で未だ加盟していない府県は、京都府と滋賀県、あと和歌山県が間もなく参加するというのを彦次先生から伺っています。

普及・支援に関しては、大会のシンボルとして、現在は東北楽天の監督をしている星野仙一さんをお願いしております。2005年のときから大会名誉会長として就任いただいています。楽天へ行くまでは毎回、甲子園の開会式のときには必ず参加いただいて、挨拶もしていただきました。そしてこちら、直木賞作家でいらっしゃる重松清さんです。人間のいろいろなドラマをテーマに小説を書いていらっしゃる方です。マスターズ甲子園を題材にした小説も書いていらっしゃいます。そしてシンガー・ソング・ライターの浜田省吾さんも、実際には書き下ろしではないんですけど、テーマソングというのを提供いただいて試合前や試合間に曲を流すと

というようなことでサポートいただいています。

そして大会にはやはり運営資金が必要です。多方面からスポンサーを受ける必要があります。そこで、3年前からサントリーの金麦さんにスポンサーになっていただきました。スポンサー料を頂く代わりに、地方予選大会では選手が金麦を持った写真を必ず1枚撮影していただきました。サントリーの金麦は、おっちゃんたちの野球を応援してますよ、といった形でアピールしたいということで、元球児と商品のコラボレーションをさせていただいております。選手にとっては試合後に金麦が飲めるし、運営側はスポンサー料を頂くというようなウィンウィンの関係でやっています(図5)。今年はスポンサーとしてやれないようなことを聞いていますので、続くかどうかは分かりません。

#### 支援ネットワークの確立

- ・協賛企業と大会のタイアップ
- ・共催・後援団体を通じた開催PR
- ・ボランティアスタッフによる大会支援
  - 専門ボランティア: 審判員、医療スタッフ、プラカード係、司会者、ボールボーイ・ボールガール、スコア係
  - 一般ボランティア: 受付、誘導、撮影、ホームページ更新、SNS配信、インタビュー、グッズ販売
  - 団体ボランティア: プラスバンド、コーラス、チアリーディング

#### 【図5】支援ネットワークの確立

そしてマスターズ甲子園は、元高校球児だったり、マネジャーだったり、監督だったりという人たちが参加できるんですけど、その人たちだけじゃなくて審判員の方々の中にも、甲子園で1回はジャッジをしてみたいという方々もいらっしゃいます。審判員にとっても甲子園は憧れの聖地でなのです。ABC放送のアナウンサーで植草貞夫さんという方に、2005年大会のときに実際に実況中継をしていただきました。やはりマスターズ甲子園というのは、先ほども申しましたように、年齢が下は18歳から上は80歳までの幅広い年齢層の方が同じグラウンドの中で野球をしています。3塁線に飛んできた打球を直接1塁まですぐに返せたらいいのですが、

やはり年齢が高くなると、ボールが届かないようです。ですから一度、ショートに回してから1塁に回すというような継投をします。するとアウトになるかならないかみたいなタイミングで送球をされます。走る方も、塁間を走るのもそんなに速くはないので、ギリギリのところでも中継を工夫しながらプレーしています。

入場行進は、50人ベンチ登録できますので、4列縦隊で一斉に入場行進をします。実際にアナウンスしてくださるのは初代の高校生司会者だった方で、毎回司会をしてくださっています。ただ参加できなかった大会が数年ありまして、そのときは2代目の司会者に継投しますって言ってくださいました。そして注目していただきたいのがプラカードを持たれてる方々なのですが、皆さん、ご存じだったでしょうか。プラカードって、夏の甲子園は市立西宮高校の学生でないと持てないんです。しかもこの市立西宮高校の中でも選考会というのを毎年行ってまして、その選考会で合格した人たちだけがプラカードを持てるということになっています。やはり入学したから持ちたいと言って希望してくる学生が毎年たくさん居るらしいんですけど、持てない人たちも中には居るみたいです。なので、そういう持てない人たちにもう一回、このマスターズなら持てるチャンスがあると、高校時代に持たれた方々が選考会で漏れて持てなかった方々に声掛けをして、大会当日は持って歩いてらっしゃるといふこともあります。高校時代にプラカードを持ったチームが、今度はマスターズで参加している。「あのとき私、持ってたんですよ」と選手と再会を果たすようなこともあったりします。

マスターズ甲子園、実は観客が非常に少ないんです。写真で見るとバックネット裏に3分の1も入っていないぐらいだと思います。スタンドから応援してくださる方々がすごく少ないけれど、やはり試合を盛り上げたいということがありまして、第1回大会から地元高校生の吹奏楽、プラスバンド部に声を掛けまして、生バンドで全試合応援してもらえるようになりました。

そして閉会式には、現役のコラス部の高校生に『栄冠は君に輝く』という曲を合唱してもらっています。グラウンドで試合をするだけじゃなくて、応援してくれているいろいろなメンバーとも交流したほうがいいよねっていうことで、プラスバンドの生徒が選手に「頑張ってるね」と言ったり、逆に選手から「応援ありがとう」というようなエール交換も行ったりしています。そしてスタンドでは応援ボランティアが盛り上げてくれます。それからボールボーイとボールガールにとってもやはり甲子園は夢の舞台。ここでボールボーイやボールガールをやってみたいという人たちも、ボランティアとして応募してくれています。

試合終了後、現役の高校球児だと設けられたスペースでインタビューを受けています。マスターズでは全選手に対して必ず用意できるわけではないのですが、インタビュースペースを設けて、選手一人ひとりにヒーローインタビューを行うようにもしました。これは大会のピーアールだとか情報収集にあたるんですけども、大会の前に、大会の開催日程といったような情報を各種メディアにeメールであったりとかダイレクトメールとして郵送を行なっています(図6)。大会が開催されたという報告を取り上げてもらったりとか、まだ予選大会が開催されていない県に対しては、地方紙で加盟や参加募集を行っていただいたりしています。そして、大会公式ホームページも、第1回大会から手作りで作成を始めました。本日、指定討論者を担当される彦次先生は、最初に大会のホームペー

ジを作った方です。今も更新やメンテナンス等を行ってもらっています。これも学生ボランティアによる手作りになります。

そして大会当日は、facebookを用いまして、夢であったり生きがであるとか、何度でも目指したい場所であるといった甲子園に対する思いを実際にボードに書いていただきました。子どもの少年野球を引率してくれたお父さんからは、「子どもたちに目指してほしい場所」といったコメントもありました。現役の高校生からは、「OBの先輩と応援に来てて、憧れの場所であり、今度は僕たちがここに行きたい」ということも言っています。マスターズ甲子園の大会準備では、ゼミ室にたくさん人が集まって作業をしています。神戸大学の学生が郵送作業も全て手作業で行っています。筒を買うお金もないので、画用紙を買ってガムテープで貼り付けて、その中にポスターを詰めて送るというようなこともします。

運営委員会というのを、大会の約2カ月前から招集して、神戸大学の学生を中心にマスターズ甲子園に興味のある学生が集まってくるのですが、ゼミ室には椅子が20脚ぐらいしかありません。それでは足りないぐらいの人数が肩を寄せ合い、2時間ぐらいつと討論し合って大会の進行だとかプログラムを考えたりしています(図7)。選手が怪我をしないように試合前と試合後はトレーナーに身体のメンテナンスをしてもらっています。ベンチは50人居ますので、監督は全選手がバッターボックスに立てるかどうかというような采配を振るう必要があります。

### 情報の配信と収集

- ・大会告知・プレスリリース(開催前に3回)
- ・クリッピングサービスの活用
- ・加盟校、過去大会の参加者、協力・支援者へのDM送信
- ・ホームページの更新
- ・FacebookやTwitterを利用した情報配信
- ・大会公式ガイドブックの企画・編集

【図6】情報の配信と収集

### イベントマネジメント

- ・全国高校野球OBクラブ連合・大会事務局の運営
- ・運営委員会の開催
- ・大会ツール・グッズ制作
- ・ボランティアスタッフの募集・研修会の開催
- ・観客プロモーション
- ・式典・競技運営

【図7】イベント マネジメント

す。なので、50人を90分の間に出せるようにするためには、監督だけじゃなくて、実は横に居るベンチ付きのボランティアスタッフの努力も必要になってきます。このベンチ付きのスタッフが付けているインカムを使って、アナウンスルームの隣にいる競技進行役と連携することが重要になってきます。競技進行役は交代メンバーをベンチ付きスタッフから引き継ぎ、隣のアナウンス室にすぐ伝えるといった連携プレーを行って、何とか50人起用できるように進めています。

90分間の試合後は、15分間グラウンド整備をしなければなりません。その間もスタンドの方々にも楽しんでもらえるようにキッズチアや甲南女子大学のチアリーディング部の学生に踊っていただいたりします。そして観戦にくるお子さんも楽しんでもらえるように武庫川女子大学のレクリエーションゼミに所属している学生さんに、子どもたちにさまざまな遊びを提供してもらったりしています。

そして母校OBが出場するんだったら応援団もOBで出たいという学校がありました。埼玉県の川越高校なんですけど、応援団OBが自前の大きな太鼓と大きな旗を持って応援に来てくださいました。スタンドでは「お父さん、頑張ってるね」とお母さんが言ったり、子どもがグラウンドのお父さんの勇姿を見守る姿を見ることができます。マスターズ甲子園というのはプレイヤーの夢をかなえるだけではなく、その夢を支えたいというボランティアとによって作られる合作のイベントです。これまでに行った試合と、甲子園キャッチボールの参加数が大体9500人ほど。それに対してボランティアが6000人。参加者3人を2人のボランティアが支えている大会であるということです（図8）。

最後のまとめになりますが、今後の可能性についてお話しさせていただきます。マスターズ甲子園の開催で最も大事にしていることは、夢の再挑戦をしたい人たちが、世の中にはたくさん居るということです。昔かなわなかった夢をもう一度、大人になっても挑戦したいなという方とか、憧れの場所、憧れている自分の

### マスターズ甲子園は、夢を叶えるプレイヤーと夢を支えるボランティアの想いの「合作」

試合参加者:5,606名  
キャッチボール参加者:3,960名  
ボランティア参加者:6,841名

2004~2013大会全体(本大会のみ)



【図8】マスターズ甲子園は、夢を叶えるプレイヤーと夢を支えるボランティアの想いの「合作」

勝ち方とか、そういうところにこだわったりとか。そして原点返りだったり、成し遂げられなかった夢をもう一度叶えたいという希望です。例えば高校野球というのは不祥事による出場停止があったりします。過去に不祥事で出場できなかった、地方予選大会で戦えなかったという人たちが、もう一回誘い合って、「お前、あのときはつらかったと思うけど、もう一度大人になって挑戦できる、また一緒にやろう」といった声掛けがあったりします。それを高校野球に限定して行っているのがマスターズ甲子園です。

そしてスポーツライフの拡大と多様化ということを先ほど福田先生も、ヘルススポーツとか、レジャースポーツといったキーワードを用いてお話ししました。スポーツというのは、健康のためとか体力を維持するためとか美容のためということももちろん必要かと思いますが、それだけではなく、大人になっても競うだとかチャレンジするとか上達したいという人たちのニーズがある、ということを含めてスポーツライフというのは広がっていくんじゃないかなということ、マスターズ甲子園を通じて感じているところです。

本気で投げてもいいじゃないか、バットを持ったら打てなくてもフルスイングして、そしてヘッドスライディングしてもいいじゃないか、最後は勝っても負けても砂を持って帰りたいと

いう参加者が非常に多かったんです。第1回大会の時は皆さん、大きな袋を抱えて、グラウンドで砂を一生懸命集めていました。試合終了後、甲子園の球場の人からそれは大人ですから勘弁して下さいと言われてました。そこで2回大会から小分けのビニール袋に土を詰めて、それをお土産に持って帰ってもらうというようなことをして、こういう砂を集めるようなことはなくなりました。1回大会だけしか実現しませんが、こういう笑顔、いいなと思います。

そして、ユーススポーツからマスターズスポーツへ、というのは、下にも書いてますように、今まで学校の部活動のスポーツが、学生時代はメインとなって行われてきたという経緯があります。その部活動で一緒にしていた人たちがもう一度自分たちの同窓生だったり、先輩後輩を集めてするようなスポーツ同窓会だったり、職場でもそうなんですけど、そういうOBとかOGのスポーツというのが、今後可能な繋がり方かと思います。甲子園に代表されるような目指す場所、聖地と呼ばれるようなメッカ型のスポーツというのが増えていけばいいかなと考えています。スポーツ拠点づくり推進事業というのが全国で行われており、小中高校生が目指す全国大会がさまざまなスポーツで、さまざまな場所を会場にしながら、そこに人が集まってくるというような取り組みが行われています。

熟年スポーツタレントの発掘という考え方も

あります。例えばマスターズ甲子園で言うと80歳の人が実際にバッターボックスに立ちましたが、そのときに付けてた背番号が80番でした。そういう年齢に沿った背番号の付け方をして、自分がプレーヤーだというのをアピールするというのも一つかなと思います。そして、マスターズだからできる一つの面白さとしては、プロのスポーツ選手、元プロだとかトップアスリートの人とも夢の対戦ができるんじゃないかなということも挙げられます。昨年の大会に来ていた奈良県の選手で、かつてプロ野球の巨人と横浜で活躍された駒田選手が、実際にプレーヤーとして対戦されました。元プロとの夢の対戦も実現できるのではないかといいところですよ。

そしてユースに対するエールとしては、現役生がOBの勇姿をスタンドで見守ったり、甲子園キャッチボールというイベントの中でお父さんと一緒に息子がグラウンドに立ち、父親の果たせなかった夢を、お前が高校生になったらかなえてくれよ、というような夢の継承ができるんじゃないかなと思っています。今年は11月の15、16日に開催が決まりましたので、よろしければご観戦をお願い申し上げます。すいません。時間がかなりオーバーしてしまいましたが、これをもちまして終わらせていただきたいと思っています。ありがとうございました。

永松 どうもありがとうございました。